

哲学の授業

—自由をテーマにして—

女子短期大学部 村野 宣男

1938年生れ。鎌倉の日蓮宗寺院に育つ。幼少より読経、僧侶の資格あり。東北大学で宗教学を専攻。大学院在学中、米国にて哲学研鑽。宗教と倫理・理性の問題に関心。英米の哲学から研究に入るが、カントの重要性を認識。1991年、ドイツのチュービンゲン大学哲学科にて研究。宗教・キリスト教文化論・哲学等を担当。趣味は植物。(むらの・のぶお)

授業は、方法・実践・結果の三者が一体となり有機的・発展的に構成されるものと考えられる。本報告は、短期大学の哲学の授業に関するものであるが、(1) 哲学の授業を始めるに当たっての基本的な考え方(方法) (2) 教室における講義(実践) (3) 試験答案における学生の反応(結果)について述べる。授業は、平成7年前期に行われ、開講コマ数は4つで、全体で約230人の受講者があった。

(1)

私は短期大学で哲学を担当しているが、何をどのように教えたらいかがが常に課題となる。哲学者の学説を哲学的に提示する方法は、専門用語と煩瑣な論議の為に授業をたちまち学生から離れたものとする。哲学の生命は、思索し模索すること、すなわち哲学することにある。われわれは、専門的な哲学は知らなくとも哲学することはできる。したがって、学生に哲学を教えるにあたり、哲学を見るのではなく、まず学生を見て学生に哲学させることが哲学入門としては至当であろう。

人間にそなわる理性と感性は、思索と模索すなわち哲学することの中ではじめて活性化され、精神のダイナミックな展開が見られる。しかし、受験体制における形式的な死せる教育の中では、理性と感性の両者は殆んどその生気を失っている。しかしこの両者は生気を失っているとはいえ、学生の中でその本来の若者らしい姿で隠されているのである。したがって哲学の授業の課題は、何等かの契機により隠されている理性と感性を活性化させ精神のダイナミックな展開を計ることである。

私はこのことを試みて来たが、今年度は自由をテーマとして与えてみた。

自由は、言葉として極めて日常的であり、現代において若者が関心を持つ課題である。学生は確かに問題の投げかけに反応した。しかし、日本の教育では、教師と学生間の対話の習慣が形成されていない。学生との直接的な対話を(特に教室で)試みようとしてもなかなか困難である。哲学の生命が対話(dialogue)による哲学することにあるとすれば、対話の習慣の欠如は哲学にとって致命的である。学生との対話はしたがって試験を通じてこちらが問い学生が答えることによつて主として成り立つのである。何年か試験を積み重ねて行くうちに次第に学生が何を考え何を感じているのかが判ってくる。そして学生の表情を通して私の言葉との交流を確めるのである。教育にも東洋的な以心伝心の伝統が生きている。

(2)

自由という言葉は極めて日常的である。しかし、一度自由について考え出すと自由が何

であるか判らなくなる。自由であるとは心理的事柄なのか。あるいは論理的関係性か。自由であるとは何をしてもよいことなのか。自由であることと思考することの間に関係はあるのか。現代は果して自由の時代なのか等の問を発することによって自由を回って考える以前に知られなかった問題が次々と展開してくる。ソクラテスの言う通り、知らないということを知らないことが多い。学生に種々の観点から問を投げかける。

自由とはそもそもどのようなことなのか。誰しも自由の対概念たる拘束を考える。自由とはまず拘束からの自由である。学生は高等学校の時から、種々の拘束からの自由を願って来た。何故に拘束を脱した自由を求めるのか。勿論そこには幸福が存すると考えられている。彼等は今、服装や髪形に関して自由であり、下宿住いの学生は家の拘束からも自由である。しかし、自由の国は思ったほどのパラダイスであっただろうか。拘束から解かれるということ自体に意味がありここに解放感という幸福があろう。しかし、問題は拘束が解かれた状態を如何に充実させるかであり、ここに自律的意志の意義が生れてくる。就職や結婚が他から強制される時には、自由がなく幸福もない。したがって拘束から自由にならねばならない。しかし、自由になったからといって柵からぼたもちが転がり込むように就職が出来、結婚出来るわけではない。ここでは自律的意志が問題となってくるのだと説明する。更には、自由は強制されないことであるから責任も存するという問題をとする。自由であるとは、自己の生きる道を自己で選ぶことであり、したがって、それに自己が責任を負うことである。学生はここで非常に厳しいものを感じて後込みをする。

自由のテーマだけで半年の講義を行うことも中々大変である。又、自由を中心としながら哲学の他のテーマになるべく多く言及することが哲学入門としては望ましい。そこで、自然界・動物界・人間界を眺め渡して、自由であるのは人間のみであるという説明をする。雲は自由に空に浮んでいるように見えるが、

全ての自然現象は必然的物理法則に従っているのである。自然界には自由はない。坂を転がる石は、自分の意志で途中で止ったり、方向を変えたりすることはできない。鳥は自由に空を飛んでいるように見える。しかし、動物の行為には自由な選択性はなく決定されているのである。選択には、反省的思考と時間概念が付随する。もし動物が、過去を反省し、未来に向かって一つの行為を選択するとすれば、恐ろしいことであり、すでに動物ではなく人間である。議論が高度になり、ほとんどの学生が理解できないところまで行ってしまいが、私としてはここまで言わねば気がすまない。“すでに動物ではない”というところで何人かの学生は頷いている。私は更に、道徳的責任と自由の関係にまでつき進んで行く。人間が自由であること、すなわち一方に強制されていないことが、人間の行為に責任の生ずる根拠である。人間は、良心によって何が正しいか知っている。ドイツ語では良心に対して知る(wissen)から来たGewissenという語を使っている。人間は何が正しいか正しくないか知っている。そのどちらかを選択するかは自由である。そしてこの選択は人間の能力や技術にかかわることではない。これは態度の選択である。良い心掛けになるか否かの問題である。これは、誰でも行うと思えば出来ることである。したがって人間には、道徳的責任を問うことができるのである。この議論について行ける学生は多くない。しかし私は続ける。人間存在が自由であるということは、人間存在が根底において不安定であることを意味している。ここに人間の不安の根拠がある。ここまで来ると学生ばかりでなく自分でも解らなくなる。学生は、苦しそうに口走っている私の顔を眺めている。

知識は自由を与えるという別のアプローチを試みる。ワープロを自由に使いこなすためには、使い方を知らなければならない。これは分り易い。意志を持っても行動が伴わなければ意味はない。そして行動は知識がなければ生まれえない。ここで知は力であること、知は価値的に中立であることを付け加える。こ

れで一回分の講義となる。先の道徳論に関連して、よい意志だけでは具体的道徳的行為は成立しないのであり知識が必要であることを付け加える。ここから自己の内面を見つめることからの知について述べる。生活がスムーズに進行しないのは、自己自身に適合しないことを行っていることから来るのである。才能に合わない勉強や仕事をしてもうまく行く筈はない。自己自身を知ること、これが先決である。仕事もそうであろうが、結婚では、自己と相手をよく知ることが大切である。両者がよく知り合い理解し合う時には、自ら両者を結びつける感情が生まれるものである。よく知らないで感情を先行させる盲目的結婚は失敗するとよくよく注意をする。ここまで来ると、意志の実現のための知ではなく、意志そのものの前提としての知という意味が出てくる。考えてみれば、選択意志の前提となる選択肢は知によって捉えられる故に、選択意志は知を前提としているといえる。良心そのものが知であった。残る選択行為そのものが知から外れるということになるのか。ここで問題は錯綜してくる。そして悪い癖がでて、古代ギリシャでは、知恵を至上のものとして、知恵によって幸福を確立したのであり、哲学(Philosophy)とは、ギリシャ語の philosophia (知を愛する) から来ているのであると哲学講義になる。ギリシャのことに関しては一言触れねばならぬという義務感のようなものもある。そしてここでは自由が姿を隠してしまって学生ばかりでなく私も完全に混乱する。更に私が仏教の関係者ということもあって、やはり義務感から、仏教の諦めとか悟りにまで話が行くと学生には本当に悟りの境地が必要となってくる。哲学のことを考えないで学生のことを考えたつもりが、結局は哲学のことを考える結果になった。これもつきつめれば、自分のことを考えていたわけであり、それこそ自由勝手な授業をしたことになった。

(3)

そもそも自由という形而上学的問題に簡単に答えがでるわけではない。はじめから答え

のない問題を学生に課するのは、自由にもほどがあり無責任といえようが、哲学の生命は哲学することにある。ここで学生をいくつか紹介して、学生が私の想像を越えて哲学したという言い訳をしてみたい。試験問題に、“自由に関して自由に意見を述べよ”という題を出した。学生は感ずるまま、考えの赴くままに自由に意見を出す。われわれは考えの枠を知らないうちに作っている。学生はその枠を外れたところから意見を出してくる。しばしば学生は自分の意見の価値を自覚していないことがある。後になって忘れてしまっていることもある。しかし、精神の輝きは無自覚の時こそ美しい。

自由の国はパラダイスに見える。“人間が求める自由とは魅力や刺激を指して言う事が多い。”しかしそこに到ると幻滅する。“自由は求めているからこそ魅力的であって、手に入ってしまったら空虚なもののような気がする。”学生は自由を感性的幸福と考える。拘束からの自由において幸福が獲得されるのであるが、そこには空虚がある。拘束が解かれると、自律によって自己を主体的に方向づけるかあるいは刺激によって自己を忘れるかである。自由であることは面倒であると感じる学生は多い。“現代社会では、自由というのはむしろ面倒かもしれない。何かをするとき全て決まっていれば考える必要もない。”ここでは消極的ではあるが自由が自覚されている。

意外にも自由を冷静に見る目がある。現実的に自由を獲得するためにはまず法が必要であるという。“法に従うことによって誰でも好きな職業を選べるという点で自由であると言える。”“元来人間は、自由になるために、それを保障するものとして法律をつくった。”“法による秩序ある社会と法のない無秩序の世界のどちらを選ぶかもまた人間の自由な意志による。”という穿った意見を出す者もいる。しかし、“就職で男女平等に法が定めても会社(人間)が理解し認めなければ女性には自由になっていないのだ。”としてより鋭い分析がなされる。この意見では法と人間の理解、すなわち法と道徳の区分の問題が

指摘されている。(このテーマは授業で詳しく触れられたものであるが。) 実は自由は、外的規制たる法の中にあるのではなく、内的規制たる道徳の中にある。“もしみんなが自己規制ができなくなったら、社会のルールや規則でしばりあげるしかなくなるので自由がどんどん離れていきます。与えられている自由を道徳心をもってよい方向へ使うようにしないといけないのです。”

学生は自由を考え自由を意識する。そして、彼等が受けてきた教育、あるいは彼等をとりまく環境がいかに自由と程遠いものであるかを痛感する。現代の社会は“マニュアル”によって統制され、“自分自身のことがわからなくなっている。” “マニュアルの枠通りにさせようとする傾向”は自由を奪うのである。現代の教育は、創造的自由の道を塞ぎ自由の芽をのばすことはない。“自由になりたいと思うが何をしたらよいかわからないことに悲しみを感ずる”という叫びがあがる。現代は自由であるというが果してそうなのだろうか。“現代は学歴社会である。小学生は、有名大学に入って有名企業に就職するために塾通いをして夜遅くまで勉強する。こんな現代社会に自由なんてものが存在するのだろうか。” 現代は、言い知れぬ不安を若者に与えてもいるのだ。“私はこう思う。自由が人間を

不自由にさせているのではと。私自身としては今大変に自由な生活を送っている。しかし、心の中には不自由さがただよっている。これがはっきりとした何かとはよく分からないけれど自由であることが自分がこれから何をしたいか分からなくする。私を不自由にしている。” 現代は世界観を欠く時代である。現代の自由は方向性を欠いた単なる欠如性なのではなからうか。しかし、生きていること自体が自由であるとする主張もある。“生きていること自体が自由だと思う。日常生活を営み、そこには色々な心配事や悲しい事があるけれど、生きている以上色々な可能性があり、自分の方向性をみきわめることができる。このことが自由だと思う。”

学生は答案の方が私の授業より生き生きとしており、幅があり深みがある。学生の知性と感性の前に頭を垂れ感動する。そして、哲学は教えられるものではないという感を深くする。しかし、次のような言葉に巡り合えたのは幸いであった。“授業で自分自身で自分を見出していかなければならないと聞いていたが、このことは中学生・高校生にも教えておくべきだと思う。意味のない英語をたくさんやるより、それをすこし削って哲学の勉強をした方が有意義だろう。”